

御
 指
 書
 後
 阿
 努
 刺

五

全



5
 1895





阿滿安賀利

龍墨為雲烟及飛口為文章
誰豈不可異之哉特蒙大
平之化華山桃林之馬牛之
肥矣風雨日若海不揚波
業既百年矣粵桃林之翁
優遊乘牛年拾玉積而



八〇

本卷號曰誹謗雨賜蓋天
地之一字無息猶未知其
始終然二字無息故知此
文之無息尚未知其是非
也乃知人此門則求其放心
自防邪志如是則窮本知
變之謂欽以為之序

音

享保弟九陽年苟政太
陰之在泉仍用筆於立
穩初候

狂士種山



磯をよびてくものけいものこまおれ
わささきあかぬきむしむしむし
心わたりし今の上なる志もはかすやうに
猿ありし馬ありの爺とよくもあれ
いりぬもあはれ早もくふちうね龍虎喘
おろしよ爺くも新鳥の西成相見た
皆あまの賜なりぬらうもあましく
者あそびたはるけく合あそびの根

磯かきぬきあそび身城をくはしぬ家
あそびのうきあそびもなりや喜雨亭子
くわあそびしくさのちんあそびさむら
乃由法してゆるくお晴らし紅日青天
曉をぬきし玉の中子あそびさむら
中に若さを求むあまのつとむら
ものあそびし年いふのえき川の株
あそび十の白整ききふにほあそび

大練舎



梅井の待宵の侍位乃住小一小徳林はるるの
 三軒葎屋の少人よききるる花のわきもを花
 此真乃雅子かくまへんか乃りあやうく
 身より判し一侍

大練令

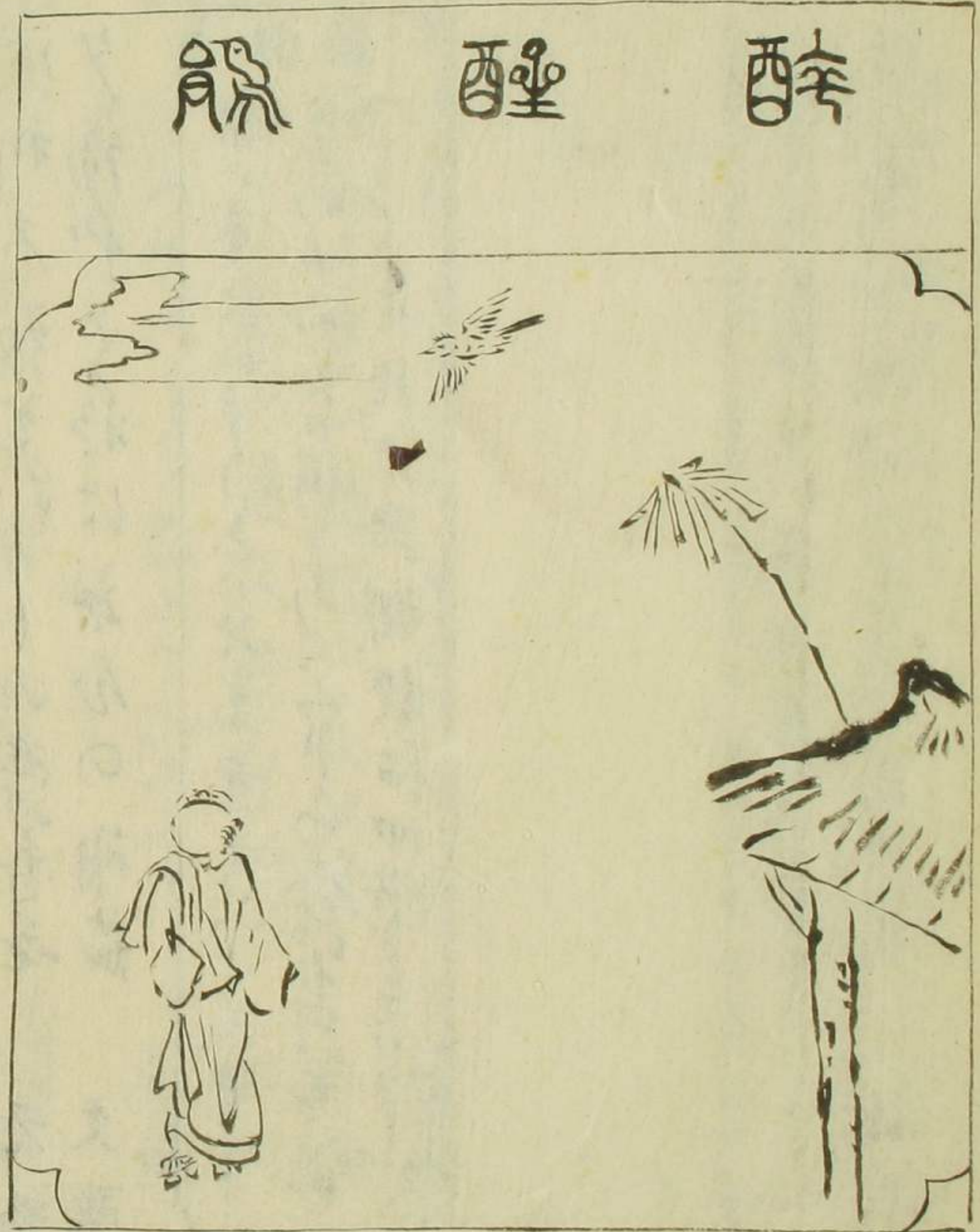
とくしてと梅の縁く糸布るの庵 鐘山
 虫喰の冠ほをる子そまらゆ 柗里
 枯木にもたはさく木のれ所外 紫角
 藤秋あゝ寺や惣持の花女友 立梅
 定高し一花の建久登や何 和川
 好くしをわがさるるさるる 壺竜
 其誰凡をこそめとて
 仙界を比も柗園乃成る外
 花月堂
 紅角

酒折乃菊をむくの藤野香甚 甲州市川住敷之庄 老翁
 夕陽やまねに江心の胡茄 文隣

評 奈ハ葵にかさう山ハ此庵寺よへく三井と
 云 かつまぬ花の梅さるるつらつら花かのをま
 つつ々 花於京路 獨誇古四條をえりて

花園や松林おもしろん千羅馬 柗翁
 其後も花より一指は極白 陽秋
 来て足道も花や善し寄るに香 沾涼
 こ乃るぬ雪や湯島はあわさ 柗翁
 侍人重んじ砥餅のふり家の風 柗翁

醉 醒 醒



毎分別夜時さくぬ日乃旬
 羽舟乃浪の志ぬ舟はほく
 つふぬを青き眼のや露一云
 橋裏の灯の志きく時を
 起カラツつとさ川若の車井戸
 帘さすさかたや保ささ
 的る今さく親乃作こと

白峰
 今更
 當国
 沾涼
 千本
 鐘山
 風女

李白々俺子對し一闌明々東窓は移ふささ醒
 さらんまらほ源を二四八の初ささたらんね
 痒さすたふれと死物ささけを一声山鳥暁雲
 外と真をささささ伸すさささ
 古詩集

白く眼を捨るや出處を郭云
かうは着ハ下戸に安んずる香
相ハ我處にて痛くはなす
郭云百會にあつて古語
振つきの素白く履や靴も
耳をぬく水難きの汚き
出免除の樹ハ礼や蜀魂
まゝさ免戸内くひふり杜宇
稿ノ音と笑つても一存と
引明や我々の捨る保ちを

磐筑
啓史
丈岳
東湖
東巴
琴松
樵星
嘴青
甲列
老翁
樵梢

志のわや蒲津傳ねく郭云
大ふせに根原もあし蜀魂
志のわや根根ハふりし子規
名代乃麻ころるれす郭云
あつて後悔のやちしは
一夢ハ延齡丹よ切らさ
弁門子子水あらや杜宇
さくくを告るやまの時多
一眠り後戻ゆき杜宇
法もも子伊羅保もまの子規

泥亀
糸深
雪朝
立梅
調笠
柳條
普川
吟之
小松
一之
英

評
 二日遊於其地... 乃田を
 云
 不用口笑... 大度千回夜外八尺と
 多の... ち此の

うり... 樵翁

六陽

其の物... 胡馬乃... 素川

卷... の... 梅祖

有... 此... 千本

始氷

今更

牛乃... 犢... 樵翁

旧跡卷

聞... 故人乃... 晚湖

教... の... 正信

花... の... 鶴翁

渡大雪

水... の... 柳笑

雪... の... 塩山

柳... の... 因涼

雪... の... 布仙

路... の... 文涼

水邊乃水賢 中基 十一葉梅
 腰去糧、船子此 此を向つ
 多とらひ子雷 籬のら雷 のむしゆて
 いつと吹く本地扱乃驚
 足事を 忘れん我をの月二夜
 が骨折か のま葉 やわろ
 質茂薨、野をた らくこ 照を
 刺、燒登 磨、人多 麻は

柗翁 啓史 沾涼 柗翁 啓史 沾涼 柗翁 沾涼



日中 乃露 出る 乃中
 海客如角
 陽秋

物系乃廊を少くある薬師
 表の御子容儀中一
 如きの何を継あてぶ子引の
 篠をけくと死燈蓋の
 庵をそのと死あつるの
 木のあしあひある産
 四のちの胡あつるの
 紫のしつと月寺の
 銀のしつとあつるの
 長あつるの連麴の牛

啓史
 柘菟
 沾涼
 啓史
 沾涼
 柘菟
 啓史
 沾涼
 柘菟
 啓史
 沾涼
 柘菟
 今

ゆるむをく俵をまをく籍の肥
 國主の居のかぶ糠俵
 神漏岐の神漏義のを村の
 送りまをくく君の小袋
 なんだの薬師とある日
 浦川へ着く六月の雞
 活をくハ振ふ袖の杉
 喉子かゝるは返るの掛結
 持子くも振るをの浦あり
 波志のりある廿又

沾涼
 啓史
 柘菟
 沾涼
 今
 啓史
 柘菟
 沾涼
 今
 啓史
 柘菟

中希子かつくはるる庭目
 猶ア々々々々拍子心
 黄耆堀る堀る大社を方せり
 雪浪をうて多ふくを綴
 本毒ハ奇枕尼子星へ中
 牽強く疎救ハよろしく信依
 下はさてもてあゝ気色は其の言
 何くれ細工妻の一にち

極子
 拍子
 啓史
 極為
 沾涼
 啓史
 沾涼
 小く

覚子たり六十よりく松乃蟬
 浮木の亀を細涼乃魚
 季明今日かきつて市車子
 嘆子を何と名香の白灰
 茶屋の月客より出く客子入
 利口よりたどる酒の巻
 神木の芙蓉のやうな恋はし
 人心何れを寸うのえり

蟬苑
 幽蘭
 可敬
 秀翠
 圓志
 圓志
 改柯
 櫻畦

あし繪の又唐衣かろりて
我郎郭ハ平つてこりて
表島やがしゆりぬも老き
きし強き際り産所判友
今と蜂の白樹に百合の咲く人
木の羊薙て絶つるとき
有穢をたす、五條の新内裏
竹を柱ふも三仗あつて
目蒼や逆巻浪の華を
総も母めけずこりて

青葉
磐筑
秀翠
可敬
園志
青葉
幽蘭
實際
櫻畦
改柯

尾をくぬむのさき、几中の見え
誓ハぐま、ト獨山志げ心
くく、りり、ま、は、様、子、諸、志、髪
る、子、は、ゆ、り、り、形、う、形
硝子の眼燈五目の助たり
激^多ゆき、を、法、眷、乃、き、活
在、心、若、風、高、ま、り、く、事、三、寸
ふ、ま、を、強、書、も、今、の、足、利
棧、留、を、く、り、り、居、る、ま、り、海
さ、ま、を、浪、人、知、り、海、組

青葉
櫻畦
可敬
園志
磐筑
秀翠
改柯
幽蘭
實際
可敬

坂口を踏ぬころ月圓
 待まらまら水く優を分
 十二支にままら此猫の多と恨
 老の牛飼をぬく曾原
 赫奕とひかむせとふごま
 伊勢結衣の例は帯串
 行きの月も暗く花は
 民のゆらハ格の板極

板畦
 改柯
 園志
 實際
 青葉
 幽蘭
 磐筑

武野燭や線子まら虫の多
 恥く厚ふ糸月乃水
 所流子分列りの赤らん
 赫奕まら中よ上格 拙キ
 夏虫の草にも深と殿の糸
 かつ桶まら 老ハ何なる
 人別は厚まら糸と松まら
 協らまら口祝傳が川屋
 あらひこの羊に遠の仕業
 草葉の進く足まら

風甘
 岸松
 當国
 東巴
 子本
 拙翁
 東湖
 風甘
 東巴
 當国

水石をちやうくしりしるは
 榎木子ありぬ 虹のし末
 あいぬつ子脱てくまてハコの色
 我身に物く夜を世の中
 佛法のこころぬこ子初念志を
 幾のたしり こ水 此れを
 有西の俵鼓 来ハ花乃朝
 大を男 風 中のりしる見
 岩川のぢやくや 結るあはる
 神急物し 袖下の紋

榎翁 風 東 千 岸 當 東 岸 千 榎
 翁 女 湖 本 松 国 巴 松 本 翁
 榎 風 東 千 岸 當 東 岸 千 榎
 翁 女 湖 本 松 国 巴 松 本 翁

至事くをちをぬく 榎のこ
 口つお成り子 子昂けはら
 一輛は怖るる 尾燈口と後
 走つる甲斐ある 君のたを
 志ましの橋の油 濃へこの
 宿子根あるし 親し隣り
 世の上を思ひるの 此むらつ福
 修りのそりの つかいんまめ
 園西の積人くまら 雲の月
 夜長のこくし 岩のま

岸松 當国 千本 東湖 榎翁 風女 東巴 岸松 當国 東湖 榎翁
 岸松 當国 千本 東湖 榎翁 風女 東巴 岸松 當国 東湖 榎翁

折るももろ枝りまるい枝の枝
ほろも目ある中て油汁
其の大豆莢をむく色増す
あつち者子の内川のあ
よおちのいの白く産出する心
光りのとけふ印の毫毫

風甘
干木
極翁
東巴
東湖
枕毫

首尾

山寺 驕 度 鷄

極翁

都く平丈我しくまの恒

東巴

着るる髪三ヶ月乃で好云そ

風甘

揚湯桶磔押

全

履負漆白晝

東巴

磨輿滝黄昏

全

むしりの田廬をれる水柱の白

老翁

板紫の門えかるれ

全

腹

ひかばりふふはがぬだをふ
 えんこたくでうしきてらす
 ふ乃れははいふはふら
 るあのはふさつそ海にあ
 はれさあしむのびあえか
 ひかかせなせ若もはふあ
 るぬふそはハ祿母やすせみ
 れのれさわらぶあくち家を
 るあにまふいのをかまら
 をこへんかへとうご乃ちか

文之拾以二百二十字 表八句

啓史 権翁

鳥若母中上
欲違君匪番

風廿 全

しんきりきり乃新井くく

権翁

沖のきりきりくくくく

東巴

少浪の相如ハ二十五樹

風廿

能摺縦結粗

権翁

來花冷飯將

東巴

虫の糸風吹るハマヨリヤカ

桃華



右トモ左カキモ
牡丹乃
岩丸
松山

此のくくと月を反る
 松乃松
 横よりどかろせよい通る
 鞍をこぼるる例の破
 神の空
 舞のまろく
 庫と根を
 うりし松を
 招餅

松乃松
 松乃松
 松乃松
 松乃松
 松乃松
 松乃松
 松乃松
 松乃松

桂影

明月やあまをとも照る行も如く
夜もあまをとも照る行も如く

松花
陽秋

堯曆

川音如流に遠し河に流
布川の條よこむし家来の流
流葉より少の明り一障乃流
去日影の苗もあまをとも照る
炭のより炭土をりんひの流系
星流つづの夜明けの流

啓史
琴松
東湖
桃梢
桃翁
沾涼

一表

渠^カ夜^ヨ業^ノ樂^ラ 錦^{ニシキ}
田^タ樂^ラくく馬^{ウマ}刀^カ乃^ノ窮^{クワウ}
花^{ハナ}あまをとも照る流^{ナガ}流^{ナガ}五^イかけて
踏^{フミ}躰^ミ指^{ササ}南^{ミナミ}鼓^{ツヅミ}隆^{トウ}
爰^{コゝ}別^{ワカ}直^{ナカ}釘^{クギ}鋌^テ子^コ
何^{ナニ}く^ク木^キく^ク破^ヤく^ク
勝^{カチ}菊^{キク}白^{シロ}寝^ネ躰^ミ
仁^ニく^クば^バく^ク流^{ナガ}板^{イタ}の表^{ウラ}

岑英
桃翁
啓史
桃翁
岑英
桃翁
啓史
岑英

上野日々

かいさや梅唐破風時明
今片々根毛先母波や花乃を
此園乃梅好色りり中大夫

元陽

空天乃海を比ますや種
又も日尺尺ぬ世なりり涼橋

桂夕

自今有月十ノ十好夕
新月やあゝとる不有店
早如月幸と厚は是の境を

千本

意川

峯英

東巴

梅翁

梅翁

陽秋

葉二

送餅の栗乃卯や一尚願

櫻乃花此をさる厚徳

傍例如往舟の斐も著ひら

聖子岫より鯉ふかく

其の面子月をまを招く漆

至物を渡り桐乃落合

位三所、神ありり新あそ

小刺乃をの如ゆくが窟

千本

絡史

磐筑

梅翁

啓史

千本

梅翁

磐筑

若少鐘ありとくく鶴鶴いせをさ
初巻いりり村乃、室カ箱
浦山も出り是とくく梓の香
京都の二所御任の江と揺
眼移入るは箱籠にほとま
雲いふより、禪乃只中
出ろし、弟麻の埃いりり
先祖の志とくく、
この花に四十室の箱おら
鶴いいりり、女妾のわら

千本
啓史
磐筑
栂翁
栂翁
千本
無筑
栂翁

一園、梅の空のちりりかな
いつきの虹りり、鶴の列
爽子俣の白魚生りり
玉標、掛ひりり、
考の緯いりり、
麻草、登りりと落すけな
我秋を六浦の拐か多
慈心、能在中、

啓史
東洲
文岳
栂翁
今更
枕毫
紅葩
栂梢

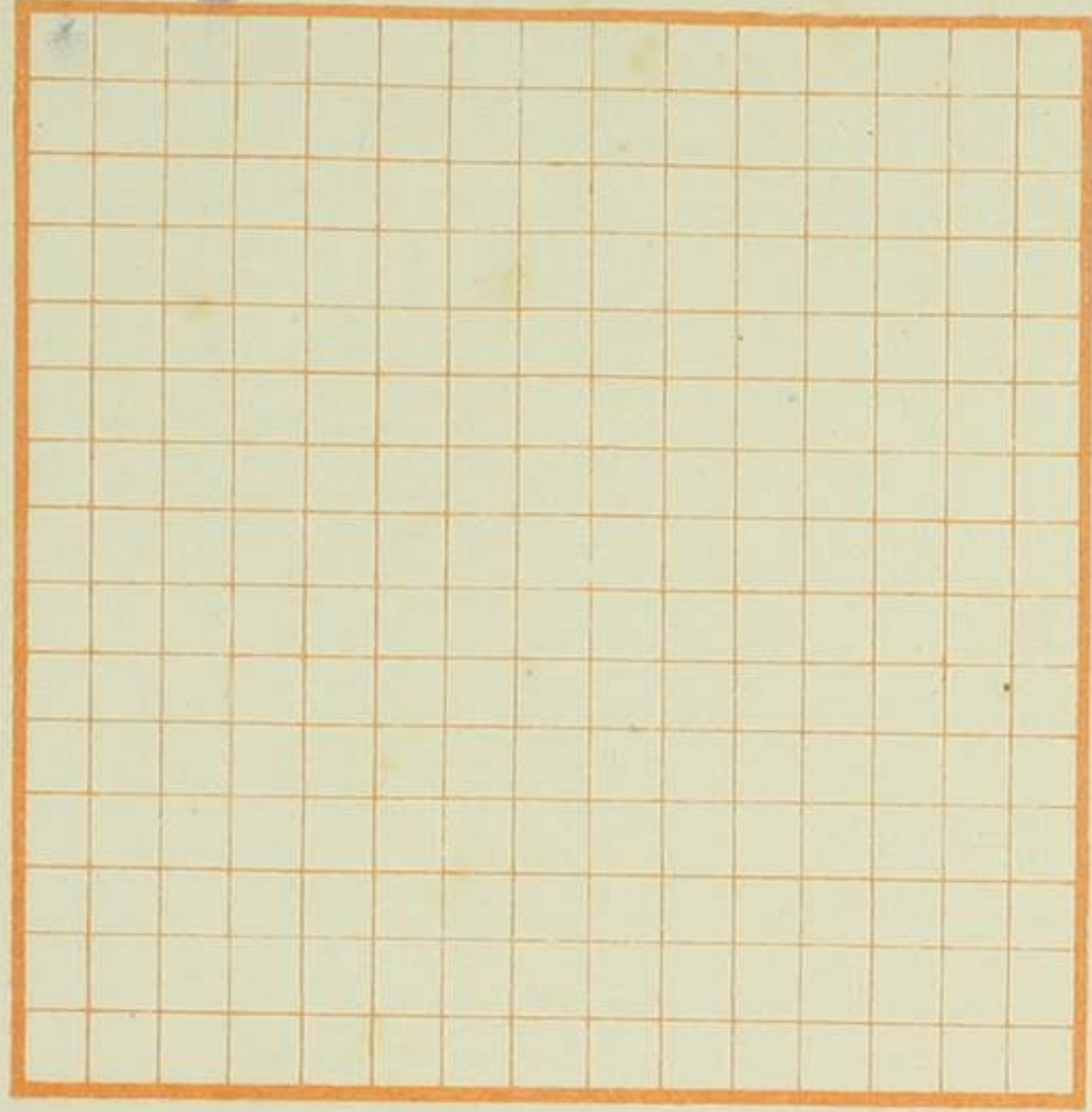
三の二の非一を好く明の
左任人の筆垂 赤
捺掛の赤懸のこまき 善授口
衣の祈の半よまき 死
無花葉の色見してより 匠の所
園三ハ月乃佐伯有衛
獅の清くまき 地と 戸の
沙師ハ上、なり 炭筆云々
髻搔子 杉をへ 善さうり
二鉢餅と物く 事ハ去る

東湖 今更 柘翁 東湖 柘翁 丈岳 柘翁 丈岳 今更 丈岳

斗為中よめりてまき 衣更
物のまきまき 是はくり 金
聯子 鹿の 高き 園伽の
柘く 晴く 煮餅の 善
吾料の 乾を あり 大津 筆
麻子 まき に向 少 針口
多む 子 小 便く 水く 新き
不取 正 算と ば 多き 物
多き の ぬれ 色を ぬ せり
倍 従ハ ばく くり ぬ 柘翁

柘翁 紅葩 柘翁 紅葩 柘翁 丈岳 今更 柘翁 今更 丈岳 東湖 柘翁

4年10月



石所り山よりまじし 十二夜
 帆より来る丁ハ 松茸の足鞋
 芳藁の巾のあそび 袖のまわ
 ひり川と物系 沖倉の秋
 糸造り八坂帯の袖のたき
 靴子換する 初老の秋
 美子抱中 羊造作の筆後
 菊合せふ まと 卯之

今更 啓史 文岳 梅梢 紅葩 啓史 東洲 桃翁

石所り山よりまじし 十三夜
 帆より来る丁ハ 松茸の草鞋
 芳義の夕のあそび 初めのお
 ひり川と物系 津橋の秋
 新造の八坂者の神の伝言
 靴子換する 初老の秋
 美子抱中 羊造作の業使
 菊合せふ 老と 幼と

今更 啓史 文岳 梅梢 紅葩 啓史 東洲 桃翁

